Shinano Mainichi Shimbun 2006_3_4

国際通信

信州へ

ドイツ

小野・フェラー・雅美

市民の手で子どもを救う

ノルトライン・ウェストファーレン州の州都デュッセルドルフの少し北にオーバーハウゼンという町がある。そこに平和村ができたのは一九六七年、ベトナム戦争のさなかだった。犠牲となった子どもたちを治療し、再び社会参加できるようになって故郷に戻るまでケアすることを目的として市民の手で設立された非営利団体である。

このNGOが延々とすべてを個人や会社の寄付（年間三億円強）で賄いながら活動を続けている。始終変わる世界の紛争地域からの子どもたちが二百人前後、彼らをケアする百人近いスタッフたちと暮らす。

今九カ国から来ている子どもたちのうち、アンゴラが半分近くだ。三十年間続いた内戦の傷は大きい。ドイツ、オランダ、オーストリアに百以上ある提携病院では、紛争地で大けがをした子どもたち、チェルノブイリ原発事故の影響で生存の危ぶまれる内臓奇形を持った子どもたちなどを無償で手術、治療し、共同生活が可能になると、平和村でリハビリを受けながら帰国の日を待つ。

二〇〇四年には千六十一人の子どもたちが平和村で助けられた。加えて何十トンもの援助物資が津波、地震被害地域へここから送られた。

某財団の寄付により造られた公園の前に、同様に建てられたボランティアスタッフたちの宿舎、そしてドクター・マイヤーの診療所がある。この先生、十三年前に外科の開業医をやめたあと無償で週三回子どもたちを診察し、各病院との連絡、リハビリ治療指導、帰国の時期の決定などをされている。診察日に居合わせた私は、二十人くらいの子どもたちが期待いっぱいの顔で待つのを見た。先生の一言で、次の便で帰郷可能かどうかが決まるからだ。そしてひとりひとりの子とまず握手して、穏やかに診察を始められる先生。

ボランティアは彼一人ではない。子どもたちの送り迎えの運転手さん、事務やキッチンのお手伝いなど。たくさんのドイツ人の中に十人近い日本人もいる。大抵が「こんなことで一生を終わっていいのだろうか」と考え、自分の将来を模索する日本の若い人たちだ。

ドイツに来る二歳から十七歳までの子どもたちのほとんどは苦痛とトラウマを持つ。親から離れ、言葉もわからない国に来るので、夜泣きをしたりおねしょをしたりしてしまう。それをそのスタッフたちがミーティングを重ねながら三交代で面倒をみている。兵役拒否者や、社会福祉関係の勉強を始める前または勉強中の学生などもドイツのスタッフの中にいる。

究極の平和村の目標は、ベトナムで成功したように、現地で現地人によるサポート体制を築きあげること。アフガン、カンボジア、タジキスタンなどで多数のプロジェクトが着々と進んでいる。

（おの・フェラー・まさみ　通訳・翻訳者、松本市出身）